

マキシマム・エンターテインメント 2.0

マジシャンが一流エンターテイナーになるための方法論

著 ケン・ウエバー

訳 田代茂

 scriptmaneuver

本書をジル・イーグルス氏に捧げます。
氏は私に「分かち合うこと」の素晴らしさが、
まさに魔法マジックのようなものであることを、
教えて下さいました。

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form or by any means electronic, mechanical, photocopying, including photocopy, recording or any information storage and retrieval system now known or to be invented, without permission in writing from the publishers.

© 2019, 2020 by Ken Weber

本書は Ken Weber から翻訳の許可を得て出版したものである。

謝辞

よいマジックを演ずる場合と同じように、本を出版するという事は予想以上に手間がかかるものです。これをやり遂げるにはチームで取り組む必要がありますが、幸いにも私を支えてくれたチームは「A クラス」のチームでした。ボブ・ベーカー、ダグ・ディメント、マーク・シエルマン、ジョーン・シエルウッドは私が執筆している間中、辛抱強く励ましてくれましたし、脱稿した後も、今皆さんが手にしていると通りのちゃんとした本の形になるように、原稿の誤りを正し、磨き上げ、練り上げてくれました。皆さん、専門分野は様々ですが、1人ひとりが文才をお持ちのうえ演技の経験も豊富であるため、この度、力を借りられたことは本当にありがたいことだと感謝しています。

またキャシー・ダリーにも感謝します。仕事も家事もこなす中で校正の労をとるための時間を割いてくれました。マーク・ギャレットは私が書き上げた「デジタル情報」を、シッカリ体裁を整えた書籍にして、リアルの世界に送り出すという、本当に大変な仕事を引き受けてくれました。あらためて、皆様のご厚意に対し、ここに敬意の念を捧げたいと思います。

改訂・増補版に関する謝辞

ダグ・ディメント氏（氏のメンタリズムに関する書籍は、アンダー・グラウンドの世界ではもはやクラシックとされています）は、本書の編集に関わる大仕事のほとんどを引き受けて下さいました。今回は追加原稿分の編集もあり、またトップ・レベルのプロのパフォーマーであるお2人、すなわちマジシャンのネイサン・コー・マーシュ氏と、メンタリストのエリック・ディッテルマン氏に、ご意見を求めながらの作業をとなりました。また、その後になって、ジョン・"ハンサム・ジャック"・ロヴィック氏が編集作業に「参戦」して下さいることになり、本書完成のための主要戦力となって下さったばかりか、実践家的立場から、全文を見直して下さいました。

マーク・ギャレット氏は今回も本書の各ページのデザインを手がけてくださり、また、全文の最終確認作業も行ってくださいました。

みんな、ありがとう！

また、親愛なる我が子ら、ニーラ、メラニー、ダリルを抱きしめ、心からのキスを贈りたいと思います。彼らは遂ぞ、私のこの本に関して、全く何の感慨も示すことはありませんでした。ま、だからこそ私の人生が片寄ったものになることなく、理想的なバランスが保たれているのですけれどね。

初版の訳者前書き

「いいかい。訳せたから読めたんじゃない。
読めてるから、必要な場合には訳せるんだ」
伊藤和夫

本書は、2003年に出版された、ケン・ウエバー (Ken Weber) 著「MAXIMUM Entertainment」(原副題「マジシャンとメンタリストの方々に役立つ、演出家の手帳 (Director's Notes for Magicians and Mentalists)」) の翻訳です。

しかし、本書には今から十年以上前のアメリカの文化的背景が色濃く反映されていますので、本書を理解するためには、まず当時のアメリカの事情を理解しておかなければなりません。そこで訳者は、きめ細かな「訳注」をこの日本語版に投入することと致しました。特に独特な言い回しやジョークのようなものについては、言葉そのものを日本語に直しただけでは、その本質を理解することは困難だろうと思われます。本書をお読みになる際には、欄外の訳注も是非ご参照下さい。

本書の「翻訳」に関してですが、いわゆる「意識」は極力排し、「逐語訳」を旨としました。ただし、それと同時に、訳文がある程度「日本語らしい文章」となるよう、訳出に工夫を凝らしている箇所は多々あります。しかしそのような場合でも、英語の文法構造は最大限尊重し、出来るだけ原文に近い訳文とするよう心掛けてきました。この意味では、本訳文がたとえ「大学入試の英語の答案」であっても、まあまあ及第点がつくのではないかと思っています。

それでは、本書にはまるで自動翻訳機が訳したような、味もそっけもない訳文がならんでいるのかと言われれば、訳者としてはそうでないと信じます。著者の心の奥底にあるエンターテインメントに対する情熱、マジシャンらしいデリケートな感性、そしてパフォーミング・アートに関わる全ての人たちに欠かすことの出来ない「他者に向ける暖かなまなざし」、そういった核心までも、読者の皆さんにお届け出来るものと自負しています。

さて、この「日本語訳」原稿の完成後、それをアメリカ・ニューヨーク在住の著者に提出し、内容を吟味して頂きました（もちろん著者は日本語が読めませんので、著者が日本語のわかる方に相談されたわけですが）。その結果、「本書は翻訳の域を超えた1つの創作であり著作である。翻訳書としてではなく、1つの独立した著作として出版されるのが適当であろう」という結論に達した、という内容の返信が著者から届きました。

そのように言われてしまうと、かなりの確かな翻訳が完成したと自負する「訳者」としては、ツライものがあります。その後再三にわたり私の親友であり、よきアドバイザーでもある Paul Critelli 博士が著者への説得を試み、さらには本書の出版を引き受けて下さった、株式会社リアライズ・ユア・マジック スクリプト・マヌーヴァ社長の滝沢敦さんが、私の翻訳を丹念に点検して下さいた上で、著者に翻訳書としての出版を掛け合せて下さいました。その甲斐あって、著者からの正式な承諾を得ることが出来、最終的には本書を「MAXIMUM Entertainment」の「正規日本語版」として、胸を張って世に問うことが出来る運びと相成りました。

本書にインスパイアされて、素晴らしいパフォーマンス、パフォーマーが生まれるとしたら、訳者として望外の喜びであります。

田代 茂

注：本書では「ネタ」という言葉を所々で使っています。本書で言う「ネタ」とは、マジックのいわゆる「タネ」とは異なり、マジックの1つひとつの演目のことを言います。それは「鳩出し」のように1つの手順をまるごと指す場合もありますし、「鳩の二羽出し」のように、手順を構成する1つひとつの現象を指す場合もあります。

日本語版に寄せる前書き

私の著書の日本語版が今、ここに上梓されたという事実は、私にとって本当に驚くべきことだと言わねばなりません。

私が2001年に「マキシマム・エンターテインメント：マジシャンが一流エンターテイナーになるための方法論」を書き始めたとき、私はマジックの世界ではほぼ無名でした。でも今は、この本のお陰で、私を取り巻く状況が一変しています。

これは本を書く前には想像だにできなかったことなのですが、この1冊の本によって、私の名前は飛礫^{つぶて}の如く世界中のパフォーマーの皆さんの元に放たれることになりました…もっとも私は、私たちが関わっているマジック・メンタリズムという「伎芸^{ぎげい}」に対する自分自身の考え方を、たくさんの人に読んでもらいたいと心の底から願って、この本を世に問うたわけですが、同様に、方々からこの本を外国語に翻訳したいともちかけられるなどということも、全くの想定外のことでした。ここまでの出来事はもう、ただただ信じられないという思いでいっぱいです。

ただ、この本の日本語版の出版について初めて相談があった当時、私には日本語版の出版については、かなり躊躇がありました。事実、たとえどのような言語に翻訳するにしても、そんなことが本当にうまくいくだろうかというような、疑わしい気持ちが私にはあったのです。私がそのように疑ってかかる理由は単純明快…私がこの本を執筆していた2年間のうちで、たびたび胸に抱いていた当時の思いを、今でもハッキリと思い出すことが出来るからです。それは、英語を母国語としていない読者の皆さんには、この本に出てくる大半のジョークは通じないだろうな、という思いです。実際、ここで断言してもいいのですが、この本の多くの箇所は、英語独特の「シャレ」を背景にして書かれています。しかも単に「英語」と言いましたが、今、私が言ったのは、特に「アメリカ英語」のことです。つまり、イギリス人ですら、

私がこの本で書いたことが全て完璧に「ピンとくる」ことは望めないということですよ！

そういうわけで私は当初、この日本語版についても、私の本の「翻訳」とはせず、私の本に「基づいた」関連書籍ということで出版してはどうかと、申し出たのです。私が書いた文章の1語1語をそのまま置き換えるような翻訳には、当然なり得ないと考えたからです。何よりも、私自身、日本語は全くわかりませんので、私が書いた内容が的確に伝わるような翻訳になっているかどうかについては、その翻訳をそのまま信じるしかないわけですから。

このように私の方からも色々申し上げたことはありましたが、日本語版を出版するというプロジェクトが兎にも角にも成し遂げられた、という事実には、返す返すも頭が下がる思いが致しますし、喜ばしくも思います。田代茂氏、滝沢敦氏、Paul Critelli 氏を始め、この日本語版を読者の皆様のお手元にお届けする上で貢献して下さった全ての皆様方に対して、心から厚く御礼申し上げます。

さて、これだけはハッキリと言えますが、日本のマジシャンも、世界中の全てのマジシャンと同じ障害物に、直面していらっしゃることと思います。これを乗り越えていくためには、私たちは私たちの観客を、その観客がいる世界から、私たちがいる世界に、引き上げなければなりませんし、私たちは勤勉に稽古に励まなければなりませんし、私たちは「私たち自身を他のパフォーマーから差別化していくためのプレゼンテーション」を構築していくために奮闘努力しなければなりません。

今から読者の皆さんがお読みになるこの日本語版が、読者の皆さんの助けとなって、読者の皆さんが、そういった障害を乗り越え、マジックを演じていかれる中で少しずつより大きな成功を勝ち得ていって下さることを願っております。既にそれを体験された何千人もの方々に続いて戴きたいのです。

ケン・ウエバー

2014年12月

Foreword to the Japanese Edition.

*The fact that there is now a Japanese version of my book is quite remarkable to me. When I began writing *Maximum Entertainment: Director's Notes for Magicians and Mentalists* in 2001, I was almost unknown within the magic world. Now, because of this book, all that has changed.*

I never dreamed that this one book – which arose from a deep need to share my opinions about our craft – would catapult me into the consciousness of performers around the world. And I certainly never thought that I would receive requests for the book to be translated into other languages. This is all quite amazing!

When I was first approached about a Japanese version of this book, I was quite hesitant. In fact, I was leery about a translation of the book into any language. The reason for my skepticism is simple; I clearly recall during the two years I spent writing the book the many times when I thought to myself that a large number of the jokes would not be understood by people for whom English is a second language. In fact, I can tell you for sure that many lines in the book are based on quirks of the English language, and more specifically, English as spoken by Americans. In other words, even British people would not fully “get” everything I wrote!

That is why I suggested that this book be “based on” my writings; it simply cannot be a word-for-word translation. And being that I speak no Japanese at all, I must trust that the translation ends up giving you a good sense of my advice.

With all that being said, the very fact that this project has actually happened is both intensely humbling and gratifying. I extend my sincere thanks to Shigeru Tashiro, Atsushi Takizawa, Paul Critelli, and the others who helped bring this book to your hands.

Certainly magicians in Japan face the same obstacles as magicians anywhere. We all must lift our audiences from their world into ours, we all must practice with diligence, and we all must strive to develop presentations that set us apart from other performers.

I hope that the pages you are about to read help you, as they have previously helped thousands before you, obtain increasingly greater success with your magic.

Ken Weber

December, 2014

はじめに

医師 ボブ・ベーカー

ケン・ウエバーが口を開けば、「不思議」に関わる世界のトップ・エンターテイナーはみな聞き耳を立てます。ケン・ウエバーが何か助言をすると、1年に何十万ドルも稼ぐプロのメンタリストもそれに従います。なぜでしょう？

それは、ケン・ウエバーが、「1つの演技を、どうすればエンターテインメントに高めていけるのか」という命題の解答を持っているからです。そして実際、このエンターテインメント性を最大限に引き出すという命題こそ、世界で最高レベルの成功を収めているマジシャンたち、メンタリストたちが最優先で考えている事柄なのです。

これはまた、観客にとって一番大切な事でもあります。もっとハッキリ言うならば観客は「最大限のエンターテインメント」以外には「関心がない」のです。でも、観客に真のエンターテインメントを供する方法を、どう学べばよいのでしょうか？ 何十万回も観客の前で演技をし、失敗を繰り返せば、演技の質は向上します。でも、よい先生が現れて、この過程を歩むスピードを速めてくれるとしたら、それは素晴らしいことだとは思いませんか？ もし、自分の演技を見て、誤りを指摘し、それを完璧な演技にもっていくにはどうしたらよいのかを示してくれる、「実力たっぶりのエンターテイナー」が現れてくれたとしたら。それは「演出家」かも知れませんが、「師匠」であるかも知れません。時には「よき友人」であるのかも知れません。本書では、ケン・ウエバーが、皆さんにとってそういった色々な役割を果たしてくれます。

もちろんケンと言えども、舞台人としての経験をいきなり華々しい舞台上積み始めたわけではありません。私もそうでしたが、多くのニューヨークを本拠地とする舞台人と同様、彼もまた、ニューヨーク近郊キャッツキル山地にある、観光客が滞在するための些^{いささ}かさびれたバンガロー村…「ボルシュト・ベルト」と呼ばれた場所で、舞台人としての人生を歩み始めたのです。私が最初にケンの存在に気づいたのは、1970年代、そのボルシュト・ベルトで、

共にアテガイブチの仕事をせっせと片付けていたときのことでした（「アテガイブチの仕事」とは…モンテチエロ競馬場で所持金を使い果たして帰ってきたばかりのまだカッカしている観客に対して、深夜1時からエアコンも効かない、いわゆる「お楽しみ劇場」で公演を行うというもの）。

当時は私もケンと同じ舞台に立っていたのですが、私の方から「私たちはそこで張り合っていました」と言ってしまうと、これは自分を実際以上に偉く見せてしまうあつかましい物言いになってしまうでしょう。

そこでケンは、自分のショーを完璧の域に高めていき、その芸歴に次々に花を添えていくことになるのです。そして、その後、活躍の場をガラッと変えてしまうまでは（この件に関しては後ほど書くこととします）、ケンは北アメリカにおいて最も活躍しているメンタリスト・催眠術師の1人に数えられていました。私自身もこれまでに何度もケンの演技を見てきましたが、そのたびに本当に楽しい時を過ごすことが出来ました。一筋縄ではいかない、まだまだ子供のような学生たちが千人くらい集まっているざわついた客席だって、ケンが演技を始めると手を叩き足を踏み鳴らして喜ぶのです。そして大きな笑いの渦が巻き起こるような場面を何度も目の当たりにしました。実際、たいていの舞台人なら悪夢のようなショーしか出来ない劣悪な環境でも素晴らしいショーを演じてしまうケンに、私は驚かされるばかりでした。

サイキック・エンターテイナー協会 (PEA) が毎年開催している大会では、そこで演技をしたプロのメンタリストを公開の場で批評をする講師役、つまり「パフォーマーの中のパフォーマー」を探していたことがあります。そこに、以上に説明した実績を買われてケンが選ばれたことがありました。

なんだって？ 同僚を批評するだって？ しかも公衆の面前で？ そんなこと引き受けるなんて、どうかしてるんじゃないのか？ 当時、私たちは皆そんな風に感じたものです。しかしケンはそれを非常に素晴らしい形で成し遂げてしまったのです。

それがきっかけで、そのような「セミナー」をまた行ってもらいたいという依頼がケンにたくさん寄せられるようになりました。もっとも、そのように色々な場所で講演を行う中で、ケン自身も同様に学んでいったのです。色々なパフォーマーを研究することにもなりました。そのような中で、たとえ最

高レベルのエンターテイナーに対してでも、さらに素晴らしくなるように導くための、ありとあらゆるやり方を編み出していったのです。その後、ケンはそのいった色々な事柄を文章にまとめることを思い立ちました。その成果が、今、皆さんのお手元にある書籍なのです。

この本には、素晴らしいパフォーマーが最高のパフォーマーに生まれ変わっていくために必要な、具体的な手段や方法が書かれています。皆さんは、想像し得るありとあらゆるタイプの観客を前にして、ケンが25年間演じてきた経験を、自分のモノとして取り込むことが出来るのです。たいていのマジシャンやメンタリストがその生涯を掛けても学ぶことが出来ないような内容を、本書を読むことによって、理解することが出来るでしょう。

さてここで、皆さんは次のような疑問をもたれるかもしれません。「そのケンっていう人、そんなにスゴイというのなら、なぜ今まで1度もその名前を耳にしなかったのかしら？」この疑問には、「ケンは、大学¹や企業で何千回もショーを行ってきましたが、単にそれをご覧になる機会がなかったから」と言っておきましょう。あるいは、ケンという人はマジック・コンベンションに出演したり、マジック・クラブを対象としたレクチャーを行ったり、マジック雑誌に何かすごい記事を書いたりするような人ではないから、という答えになるかも知れません（ハッキリ言ってしまえば、現在のケンは、顧客の何百億円というお金を管理するのに大忙しなんです…つまり、パフォーマンス1本での生活をやめてから、ケンはそういった仕事を手がけるようになったのです）。ともかく、「皆さんがケンのことを知らない」からと言って、「ケンから何も学ぶことが出来ない」ということにはなりません。たとえ皆さんがアマチュアのパフォーマーや、現にそれを職業とされているプロのパフォーマーであったとしても、です。

ときどき、こんな風に思うことがあります。私自身もケンから色々学んできたわけですが、その内容を彼と出会う前に心得ていたとしたら、私の人生は、結局医者になってオシマイ、なんていうことにはならなかったのではな

訳注1 アメリカの大学では学生確保が難しいため、毎週のように「ショー」を開催しているところも多い。大学のショー専門で回るエンターテイナーも少なくないが、様々なレベルの学生を相手に演じることは簡単ではない。「大学のショーを何年も続けられている」ということは、「そのエンターテイナーに実力がある証明である」という受け止め方が一般的。

いか、って。

さあ、マジックの本当の秘密を発見する準備はできたでしょうか。皆さんはこれから、最高のパフォーマーであり、演技の分析を行う専門家であり、そして何でも出来る好人物であるケンの話にじっくり耳を傾けることとなります。読んで、考えて、そして身につけて下さい。ケンの教えを実際に活かしてみ、観客の反応が実際に変わっていくさまを、肌で感じて下さい。

「観客を失うリスク」以外に、皆さんが備えなければならない「何かを失うリスク」なんて、ないのですから。

改定・増補版の序文

ようこそ。旧版をお読みになっていらっしゃる方には、おかえりなさい！

旧版の「マキシマム・エンターテインメント」は、2003年に出版されました。その後、多くの皆さんに、次の本はいつ出されるのですか、それが無理でも、新版の「マキシマム・エンターテインメント」はいつ出されるのですかと、尋ねられ続けてきました。しかし、それに対する私の返事はいつでも、「それはありません。他のことをして時間が取れないのです」というものでした。

まあ、今現在も私は新しい本を書く時間がありません。家族や友人と過ごす時間は貴重ですし、金融関係の会社を経営しているわけですし、その他にも色々な方面に関かわろうとすると、著作に振り分ける時間はなくなってしまふというのが正直なところなのです。ただ、これはとても嬉しいことなのですが、旧版が出版されて以来、私はマジックとより一層深く関わるようになりましたし、世界中に友人が驚くほど増えたことも事実です。その結果、私はそれまで以上にマジックのコンベンションに参加するようになりましたし、以前に比べればずっと多くのマジック・ショーやメンタリズム・ショーを見るようになりました。そうなのです、私はまだマジックが大好きだったのだということです！

では、なぜ新版を出すことにしたか？

2016年に、スタン・アレン氏が私に一般講演を依頼して下さいました。氏が毎年ラスベガスで開催しておられる、「マジック・ライブ」というコンベンションで、そこに参加される1600名のマジシャンの前で行うというものです。当時の私は、10年くらいマイクを手にしたことはほとんどありませんでしたし、それほど多くの観客の前で話すということになると、10年どころではありません、そのような機会は本当にとんとありませんでした（ただ、パフォーマンスを仕事としていた頃は、そういったことは日常的にやっていたわけですが）。

この「マジック・ライブ」での講演は、「レベル・アップを図ろう」と銘打たれました。実はこの演題は、もともと旧版の仮称だったものです。講演原稿を準備していると、当時の私にもマジックの演技について、持ち時間の18分ではとても語り尽くせないほど、本当にたくさんの思いがあることがハッキリしてきました。それが私の背中を強く押し、新版を出そうという気持ちにさせたのです。

しかし、改訂版を出そうと決心する上で最大の動機は、旧版が世界中のマジック界から…それは全く思いもなかったものでしたが、本当に…高評価を受けたことでした。旧版はベスト・セラーになり（「5刷」まで出されました）、多くのトップ・クラスのプロ・マジシャンが、旧版を定期的に繰り返し読んでいるのだと言ってくれました。さらに、私の方からの働きかけは一切行わない中で、現時点でスペイン語版と日本語版が出版されていますし、大変素晴らしい仕上がりのオーディオ・ブックまで出ています（さらに、この新版を書き終えようというタイミングで、中国語版が間もなく完成するという話を聞きました。その後、中国語版を作成して下さっている皆さんは、新版が完成するまで、中国語版の出版を待つてくださることになりました）。

こういった「高評価」の中で、最も身にしみて感じられたのは、2013年に行われた調査の結果だろうと思います。これは、ロンドンにある世界的に有名なマジック・サークルという団体が発行する、“The Magic Circular”という定期刊行物のコラムニスト、マシュー・フィールド氏が、マジック・サークルの会員から無作為に抽出した人たちに調査を行ったものです。アンネマ

ン¹が唱えた「幅 150cm のマジック用本棚」という架空の設定のもと、そこに所載すべき本の現代版リストを作ろうというものでした。その結果、マジックの長大な歴史の中で出版された数々の書籍の中から、28 冊の書籍が選ばれ、「マキシマム・エンターテインメント」も、その中の 1 冊に入ったのです。当時「マキシマム・エンターテインメント」という本を著したことを別にすれば、私自身は全くと言ってよいほど無名でした（他に著書はありませんし、ネタを発表したわけでもありませんし、レクチャー・ツアーをしていたわけでもありませんでした）。それでも、「マキシマム・エンターテインメント」がリスト入りしたということは、私の著作の努力が率直に評価された結果であり、有り難い結果であると受け止めさせていただきました。そして正直なところ、著作によってマジック界でその名をとどろかせたスター級のマジシャンたち…ターベル、ギャンソン、ページ、ボーボー、バーガー、タマリッツ、などなど…と友に私の名前がリストに並んでいるのを見ることほど、身の縮む思いがすることはありませんし、光栄を感じることはありません（面白い事実：そのリストに掲載されているのは、世界中から選りすぐられたわずか 28 冊の書籍にとどまるのですが、その中で 2 人の著者、すなわちデビッド・ケイ氏と私は、共に同じ中学校の卒業なのです！ もちろん年齢は全然違いますよ、年齢は。そして、この場をお借りして皆さんに是非一言ご紹介しておきたいのですが、そのデビッドの「マジシャンのためのウケるキッズ・ショーの作り方」（滝沢敦、新城真知子訳、スクリプト・マヌーヴァ刊、2013 年）という本には、子供たちをバッチリ喜ばせるためのテクニクが見事に解説されているのです）。

また、興味深いと思うのは、何百というパフォーマーの皆さんが、旧版の「マキシマム・エンターテインメント」の中の、その方なりの「お気に入りの一節」というのを私に紹介してくださるのですが、そのそれぞれの「お気に入りの一節」が別の方とはほとんど重ならない、という事実です。旧版に書かれている様々なアドバイスは、幅広い様々な立場からそれぞれに演繹されたもの

訳注 1 Theodore Annemann [1907 ~ 1942 年] は、アメリカの奇術師・メンタリスト。近代メンタリズムの発展に貢献をした。雑誌の「ジックス (JINX)」[1934 ~ 1941 年] の創始者。ジックス誌で、「幅 150cm のマジック用本棚 (Five-Foot Shelf of Magic Books)」というテーマが提唱された。幅が 150cm の本棚しかない場合、そこに所載するマジック本は何がよいか、というもの。ジックス誌では、ターベル・コースをはじめ 37 冊がリスト・アップされた。

なので、そのアドバイスの中には、マジシャンお一人おひとりの個々の状況に対応する部分があり、ということなのでしょう。

以上全てのことが理由となって、私は、マジックというアートのためにもう一肌脱いで、何かお返しが出来ればと考えたのです。

と、いうことで、本書が出来上がった次第です。

単純にもう1冊別の本を書けばよいのに、なぜそれをしなかったのか、という疑問について…もう1冊別の本を書くという選択肢についても考えてみました。しかしすぐにわかったのは、私が言いたいことの多くは、旧版の内容に直接関わるようなことだということです。そうであるならば、それまで書いたことに、新しく書きたいことを重ねていくのが正しいやり方だと思ったのです。と、同時に、もしもあなたが何年か前に旧版をお読みになった何千人もの読者のうちのお1人だとするならば、旧版に書かれていたことを読み直すことで、以前は読み落とされていたいくつかの考え方や、旧版をお読みになった当時はあまり関係のなかった考え方でも、今となってみれば大切な考え方などを、をあらためて身につけることが出来るかもしれないとも考えました。

要するにこの「新しい」本は、「より深い」、「より明瞭な」、「より多くの」解説が盛り込まれているということです。旧版にはなかった新しい内容のほとんどは、本書後半に出てきますが、ほぼ全ての章にも、そして場所によってはほぼ全ての段落にも、手が加えられています。

ここでもう1点申し上げておきたいのは、旧版の演技に関する記述のほとんどは、私がビデオを見て考えたことでしたが、旧版を出してからは状況が激変したということです。旧版以降、私はとてもたくさんのナマの演技を見るようになり、ビデオはほとんど見なくなったのです。従って新版の記述は、より一層実践的で、実際の現場の状況にさらに即したものになっていると確信しています。

また、この新版が出るまでの15年程度の間、マジック界では好ましい変化も見られました。女性マジシャンの台頭です（「女性」マジシャン、という言い方は今後封印しましょう。女性マジシャンだって、マジシャンなのです

から)。ただ、マジシャン全体を考えれば、いまだ男性が大多数ということもあり、本書のほとんどの箇所ではマジシャンを指す代名詞が「彼」になってしまっています。申し訳ありません。

また、特に強調しておきたいことは、本書のほとんど全ての記述は、私が「プロの」マジシャン、「プロの」メンタリストの演技を見て考えた内容であるということです。アマチュアの皆さんも素晴らしいと思っていますが、アマチュアの皆さんの演技は、めったに目にすることがないのです。

それから、旧版をお買いになっていないとおっしゃるマジシャンの方々のお話も、時々伺うことがあります。そういう方々は、旧版を手にお取りになって、ちょっとだけお読みになって、たまたまそこでお読みになった記述に納得出来なかったから、お買いにならなかったとおっしゃるのです。このようなご意見に対しては、「それはおっしゃる通りです！」と申し上げたいと思います。私の本では、幅広い様々な内容を取り扱っていますので、1つひとつの内容については、それが全てのマジシャンに当てはまるということにはならないのです。だからこそ、皆さんには私の本を最初から最後までお読みいただきたいと力説しているのです。皆さんご自身にピッタリの記述を見つけるには、それが唯一の方法なのです。

最後に新版の構成について一言。旧版になかった新しい考え方や情報は全て、旧版の記述に組み込まれる形になっています。また、たとえば今、お読みいただいている「序文」のように、そっくり新しいモノが入っている部分もあります。特別な理由があって、旧版の記述を新版の記述と区別したいと考えた場合は、新版の記述を[カギ括弧]に入れて示した箇所もあります。

よろしいでしょうか。さあ、それでは本文へ。

KW

目次

| | |
|--------------------|----|
| 謝辞 | 3 |
| 改訂・増補版に関する謝辞 | 3 |
| 初版の訳者前書き | 5 |
| 日本語版に寄せる前書き | 7 |
| はじめに | 10 |
| 改定・増補版の序文 | 13 |

第1部 序

| | |
|--|-----------|
| 事前解説 | 28 |
| 子供向けマジック雑誌に書いたアドバイス | 29 |
| 「ケン」って、誰? | 31 |
| 失礼ですが、下着が見えてますよ | 43 |
| 本書に書き込みをして下さい | 46 |
| エンターテインメントを「科学する」だって? そんなの無理 | 47 |
| 第1章 エンターテインメントを求めて | 50 |
| エンターテインメントを定義する | 50 |
| 予想外なところで見つけたエンターテインメント | 51 |
| なぜ演出家が必要なのか? | 55 |
| 観客目線で自分を見よう: ビデオに撮ってみることの重要性 | 57 |
| 師匠か信頼出来る友人を見つけよう | 60 |
| レベル・アップを図ろう | 61 |
| 「ああ、なるほど!」と思った経験 | 64 |
| 大きな声で言いましょう「私はエンターテインメントが提供出来れば 本望だ!」と | 67 |
| 超有名人を見てみよう | 68 |
| 素晴らしいマジックが多すぎる | 70 |
| 敵 | 73 |
| 成功に潜む落とし穴 | 75 |
| 「エンターテインメントにまつわる印象深い思い出」について | 77 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 アル・フロッツ…マイザーズ・ドリーム | 78 |
| 私のエンターテインメントにまつわる印象深い思い出 更新版 | 79 |

第2部 基礎事項

| | |
|--|------------|
| 第2章 不思議に関するエンターテインメントの階層性 …… | 84 |
| 本物の魔法 …… | 86 |
| 「驚くべき瞬間」に迫る …… | 87 |
| 「マジシャン向けマジック」対 「マジシャン以外の全ての方々向けマジック」 …… | 89 |
| マジックの平凡化 …… | 92 |
| 第3章 色々なリアクション …… | 96 |
| 三大リアクション …… | 96 |
| ステーキを売るな、ステーキを焼くときの音を売れ …… | 99 |
| 気の抜ける音「シューシュー」vs. 肉を焼く音「ジュージュー」 | 102 |
| 第4章 エンターテインメントで成功を収める6つの鉄則 …… | 104 |
| 1. 自分のネタをちゃんとマスターすること …… | 105 |
| ヒトとスーパーマン …… | 108 |
| 少しでいいので、その全てをものすごく上手に演じよう …… | 110 |
| 人のゆく裏に道あり花の山 …… | 110 |
| 2. 自分の人柄を伝えること …… | 112 |
| 品質保証 100% 天然由来 …… | 122 |
| なあ兄さん、あんたも、俺たちと同じ人間じゃないか? …… | 126 |
| 観客は、皆さん自身を求めている …… | 129 |
| 3. 自分の演技のどこがエキサイティングなのかしっかり捉える | 130 |
| 4. あらゆる瞬間を支配すること …… | 135 |
| それから私は、えーっと、何というか、その人にこう言ったんで すよね …… | 137 |
| 観客をもっと自分の方に引っ張りたければ、低速ギアを使え | 138 |
| 観客には決して言い訳をしない …… | 140 |
| 自分が全てを支配しているオーラを振りまくこと …… | 142 |
| こっちを見てくれていますか? …… | 143 |
| 今、何ておっしゃいました? …… | 144 |
| 私を引っ張って行って。そうしてもらいたいんです! …… | 144 |
| 5. 弱点をなくすこと …… | 145 |
| スピードを抑えよう …… | 149 |
| リフレッシュのための沈黙 …… | 150 |
| マジックだけでは観客を満足させられない …… | 151 |

| | |
|------------------------------|-----|
| 6. クライマックスを目指して演技を組み立てること | 152 |
| 空気に変化を持たせる | 156 |
| 不可能性を高める | 157 |
| クライマックスがいくつも用意されている手順について | 160 |
| クライマックスまでが早い場合と遅い場合 | 161 |
| 本物のクライマックスは1度だけ、ということでお願ひします | 163 |
| 終わりよければ全てよし | 163 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 | |
| デビッド・バーグラス…ACAAN | 165 |

第3部 準備

第5章 台本の制作と稽古172

| | |
|------------------------|-----|
| 台本を紙の上を書く…とにかく書いてみる | 172 |
| 書く。調整する。その繰り返し。 | 174 |
| 射撃手となって自らのコトバを放て | 175 |
| 動作とセリフ | 176 |
| 逆転の手法 | 178 |
| 動作 | 179 |
| 次のマジックでは、1組のカードを使いますが… | |
| あれ、どこにいったかな？ | 180 |
| 記憶するってありがたい | 181 |
| ああ、如何ともし難い、マジックの抱える因果 | 183 |
| レンガの家を建てる | 184 |

第6章 ネタ選びと演技の構築185

| | |
|-----------------------|-----|
| ビックリさせたいのか、ボンヤリさせたいのか | 185 |
| 演技はネタに勝る | 188 |
| 新しいネタと、古いネタ | 189 |
| 私のネタと、あなたのネタ | 190 |
| 原罪 | 193 |
| 目的は、驚かせること | 194 |
| 強力に、もっと強力に、最大限強力に | 195 |
| いかにもマジックの道具、というモノはダメ！ | 197 |
| タネの暴露は本当に理不尽？ | 197 |
| 観客の抱いた感情を後押しする | 198 |

| | |
|------------------------|-----|
| 観客参加型の演技 | 200 |
| 警告 危険を伴うマジック…取り扱いは慎重に | 202 |
| 4つの具体例での検討 | 203 |
| 具体例その1 | 203 |
| 具体例その2 | 206 |
| 具体例その3 | 209 |
| 具体例その4 | 211 |
| 素っ裸の状態を始めよう | 214 |
| 芸術にするための芸術的要素？ | 215 |
| 飛行時間 | 217 |
| コリンとクラウド | 217 |
| 足元を見よう | 219 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 | |
| カード・マジックをするデル・レイ | 221 |

第4部 パフォーマー

| | |
|--------------------------|------------|
| 第7章 身だしなみ | 224 |
| 成功するために衣装を選べ | 224 |
| 手と爪 | 226 |
| 靴 | 226 |
| 眼鏡 | 227 |
| ハンカチ | 228 |
| 上着 | 229 |
| シャツ | 230 |
| 第8章 声について | 231 |
| 声の出し方の秘訣、私のお気に入りのやり方 | 231 |
| セリフの中で強調するところを別のところに変更する | 238 |
| 白黒ではなく、色彩が感じられる声で | 240 |
| おめえ、セリフぐれえちゃ〜んとした発音で | |
| しゃべったらどうなんでえ | 242 |
| 色々な声を聞く | 244 |
| 第9章 言葉に関する技術 | 245 |
| なくしてしまってもよい言葉や言い回し | 246 |
| 文法の授業をもう1度 | 260 |

| | |
|------------------------------|------------|
| 正直こそ最善の策 | 261 |
| 手をあげてもらふこと | 263 |
| 一方で | 264 |
| 見ればわかることをわざわざ言うな! | 267 |
| 第 10 章 どうやって笑わせるか! | 269 |
| ユーモアに関する 2 つの攻め口 | 270 |
| スパッと…核心を突こう | 275 |
| 定番のジョークですが、男がバーに足を踏み入れました | 276 |
| 以下、ジョークを最小化して最大の効果を得ることについて。 | 276 |
| ユーモアも気を遣って | 278 |
| 自分の「持ち場」には責任をもとう | 279 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 | |
| マック・キング | 281 |

第 5 部 道具立て

| | |
|------------------------|------------|
| 第 11 章 音響と照明 | 284 |
| 会場に一番乗りすれば照明が使いこなせる。 | 285 |
| 音響も使いこなせる。 | 285 |
| 宴会場 | 286 |
| 第 12 章 音響 | 288 |
| 音響システム | 288 |
| 音響システムのテスト、「え～本日は晴天なり」 | 289 |
| 「手持ち式マイク」の美学 | 291 |
| 観客を大切にする、ということ | 297 |
| マイクを使うコツはコツコツ身につけて | 297 |
| マイク・スタンドか、マイク・ホルダーか? | 298 |
| プロはわかってる | 299 |
| 実践家向きのマイク | 299 |
| マイクを使うか、使わないか? | 300 |
| スピーカー | 302 |
| スピーカーの話 | 304 |
| モニター | 306 |
| 第 13 章 音楽 | 308 |
| 音楽には力がある | 310 |

| | |
|---------------------------------------|-----|
| 音楽の使い方を間違えた事例 | 311 |
| 音楽の階層性 | 312 |
| 音楽は自由な発想で | 314 |
| コントローラーで制御、自分自身も制御！皆さんは観客の前に立っているのです！ | 315 |
| ソーマの教え | 320 |
| 適切な楽曲を探そう | 321 |
| アマチュアの音楽 | 321 |
| 使用料不要の音楽サイト | 322 |
| その他の重要なこと | 322 |

第14章 照明.....324

| | |
|---|-----|
| スポットライト | 325 |
| 「ホット・スポット」を見つけよう | 326 |
| 音響・照明の件で： | 327 |
| 自分の領地はシッカリ掌握しておけ…実例研究 | 327 |
| 解決策の検討 | 330 |
| 責任の所在 | 331 |
| 柔和でない人たちは、幸いである | 331 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 デビッド・カップフィールド…フライング | 334 |

第6部 パフォーマンス

第15章 クロスアップ・マジック.....338

| | |
|---|-----|
| お目にかかれて光栄ですか？ | 339 |
| 「またカードを引くの？」 | 340 |
| 「ちょっと奥様を拝借…おっと口が滑った。 時計を拝借出来ますか？」 | 341 |
| 「手を出してみてください…きれいな方 <small>ほう</small> の手、ですよ？」 | 343 |
| 演技を台無しにしないために、息なんて吹きかけるな | 344 |
| 「そして、心がけるべきことは1つだけ…自然に振る舞うこと」 | 345 |

第16章 メンタリズム.....347

| | |
|---------------|-----|
| デビッド・ブレインに物申す | 348 |
| 薄めてはダメ | 349 |
| タマリッツ、お前もか？ | 351 |

| | |
|-----------------------------|------------|
| 禁句集 | 355 |
| せっかくの神秘を説明し倒す | 359 |
| なんで私の名刺をビリビリ破いちゃったの？ | 361 |
| リアルに行こうぜ | 361 |
| ディスクレイマー | 364 |
| これに関連してもう一言 | 366 |
| メンタル・マジック | 367 |
| これはなんでもありませんから | 368 |
| 馬車より先に馬を連れてこい | 369 |
| 第 17 章 サイレント・アクト | 371 |
| 無駄な動き | 372 |
| ダンスの動きか。あるいは単に跳ね回っているだけなのか。 | 373 |
| 何を「言おうとしている」のか？ | 373 |
| 音楽を使う際に「やらかして」しまいがちなこと | 374 |
| ありきたりな選択 | 375 |
| 拍手のキッカケ | 375 |
| スピナ氏をがんばって探してください | 376 |
| 第 18 章 観客への接し方 | 378 |
| 「どうぞ〜」と「ありがとうございます」 | 384 |
| 明瞭な指示 | 385 |
| 舞台上の観客と話す | 385 |
| 傾聴 | 386 |
| 今、書いた通り、傾聴すること そして反応すること | 387 |
| 観客に手を触れることについて | 388 |
| #MeToo 運動をあなたも | 389 |
| 「1」は最も寂しい数字 | 390 |
| 観客を客席に戻す | 391 |
| 色々な問題に備える | 391 |
| 第 19 章 ショーの前に | 393 |
| わかりやすいライダー | 393 |
| 観客を知る | 394 |
| 誰の出番が一番か？ | 395 |
| 演技環境を整える | 396 |
| 座席 | 398 |

| | |
|-------------------------|------------|
| 舞台上がるための階段や踏み台 | 400 |
| 扉 | 400 |
| メーカーキャップ | 403 |
| 病的悪臭、など | 408 |
| 紹介のされ方 | 409 |
| 紹介のされ方の紹介 | 411 |
| でも、まずは会場に到着しなければ話になりません | 415 |
| 見られるべきか見られぬべきか、それが問題だ。 | 417 |
| 舞台に出て行く直前に | 418 |
| 第 20 章 ショーの最中 | 420 |
| 「出」の直後 | 420 |
| オエ〜！ もう我慢出来ない | 421 |
| 顔をこっちに向けてもらおう！ | 423 |
| 自分が見ているモノが観客に見えていますか？ | 424 |
| 自分が聞いているモノが観客に聞こえていますか？ | 424 |
| 臨機応変 | 426 |
| 退屈な時間をなくす | 427 |
| ミスディレクションをミスる | 429 |
| 目を大きく閉じて | 430 |
| 舞台から離れるときは要注意 | 431 |
| 言葉を屈ける、しっかり屈ける | 432 |
| 「ありがとうございます」はやめる | 433 |
| 道具は大切に扱う | 434 |
| こきたないキャリー・バッグ | 434 |
| 生き物を乱暴に扱わないでね。ワンワン。 | 435 |
| 「MC ハマー」じゃなくて、「MC は待った」 | 435 |
| 一番素敵に見える角度から見てもらいましょう | 437 |
| サイン攻めにしない | 438 |
| 次のネタに移る際の演技の切り替え方 | 441 |
| 結局のところ、それは誰のせいなのですか？ | 442 |
| 皆さん、これ、ご存じですよ？ | 444 |
| 善良な演者に災難が降りかかった場合 | 446 |
| ヤバ、あいつクソだわ。最悪だ。 | 448 |
| あなたが笑顔になれば、人々も笑顔になってくれる | 449 |

| | |
|---------------------------------|------------|
| 重くなんかないわ、弟だもの…………… | 450 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 | |
| ジル・イーグルス…「Q & A」アクト…………… | 451 |
| 特に印象深い思い出…………… | 452 |
| 「目隠し」を取る場面…………… | 452 |
| 第 21 章 ショーの終え方…………… | 455 |
| 最後の場面で舞台上に立っている人物…………… | 455 |
| スタンディング・オベーション…………… | 458 |
| | |
| 第 7 部 補足 | |
| 第 22 章 ショーの後で…………… | 462 |
| 誤解の連鎖…………… | 462 |
| 事後検討…………… | 465 |
| エンターテインメントにまつわる印象深い思い出 | |
| ダレン・ブラウン…………… | 468 |
| リオール・ソチャード…………… | 470 |
| 第 23 章 批評の仕方と批評の受け方…………… | 471 |
| ノートの内容の伝え方…………… | 473 |
| ノートの内容を覚えてもらうときの心構え…………… | 477 |
| 第 24 章 情熱と失敗…………… | 481 |
| 失敗を失敗として受け止めよう。ただし少しの間だけ。…………… | 481 |
| 情熱…………… | 482 |
| 第 25 章 そして、最後に…………… | 485 |
| 私たちにとっての名作は、どこにあるのか？…………… | 487 |
| 要約…………… | 489 |
| 訳者あとがき…………… | 495 |